

国語 試験問題

二月一日実施

注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄らんに記入しなさい。

京華中学校

受験番号
氏名

余白

問題はつぎのページから始まります。

余白

一、つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

昼休みなんてこなきやいいのに……なんていう願いもむなしく、時間は刻々と過ぎていった。今日の給食は、一将かずまさの大好きなチキンライスだったにもかかわらず、味もよくわからなかった。

気が変わって思っていたけれど、給食をかたづけたとたん、待っていたように咲良さくらがやってきた。

1 「さ、行こう」

一将は、連行される罪人のような気分で職員室に向かった。

職員室の扉とびらを開けると、萩野先生おぎのが不在なんていうこともなく、すぐに目に入った。黒いスーツが鎧よろいのようで、ほかの先生よりも迫力はかりよくがある。相変わらず眉間まげんにしわを寄せながら、気難しい顔で何かを書いていた。

「失礼します」

咲良が、まっすぐに萩野先生のほうに向かう。

「萩野先生、いいですか？」

A。 「げげんそうに、一将と咲良を見比べた。

「六年生の滝川たきがわさんと、新美にいみさん？」

名前を呼ばれて、一将はじりつと下がった。

「ちよつと、お話があるんですが」

咲良も、少し緊張きんちやうしている。

「はい、なんでしょう」

B。

「滝川くんの、弟のことです」

「滝川くんの？ 将人まさひとくん？」

萩野先生に見つめられた一将は、思わず目を伏ふせた。

「そういえば練習にも来ないし、お休みしているんだっけ？ 風邪かぜ？」

問いかけられて、一将は小さく「はい」と言った。

「違います」

咲良の強い口調に、一将の心臓が大きく跳ねた。そうと決まったわけじゃないのに……。

「あたし、見たんです。月曜日の朝、将人くんが荻野先生に怒られてるのを。将人くん、みんなの前で怒られたのがすごくショックで、チームの子にもからかわれて、学校を休んでるんです」

「そうなの？」

C。

「あ、えっと……そのせいかどうかは」

言いよどむと、今度は咲良ににらまれた。

視線をうろろさせていたら、ハシケン先生と目が合った。絶対にこっちを見ていたはずなのに、すいっとそらされる。くっそく、ハシケンの裏切り者！

一将は、汗をかいた手をにぎりしめた。

覚悟を決めて、顔を上げる。

「あいつ、大縄跳び大会に出るの、楽しみにしていました！でも、みんなに、負けるから出るなって言われて、出るのをやめるって」

いったん言いはじめると、いろんな思いがあふれてきた。

「勝たなくちゃダメですか？足を引っ張るやつは、出る資格がないですか？勝つことが、そんなに大事ですか？だつたら、できるやつだけ出れば……」

「それは困ったわね」

D。

「わかった。近藤先生と話して、滝川くんのおうちに連絡するから」

「え？」

一将は立ちすくんだ。

「大会に出るよう、将人くんを説得するから安心して」

「説得って……」

「教えてくれてありがとう。もういいわ」

荻野先生は立ち上がると、そのまま将人の担任の近藤先生のところに行ってしまった。近藤先生は、若い女の先生で、荻野先生の声かけにあわてているように見えた。

残された一将と咲良は、行き場をなくして顔を見合わせた。

「……行く？」

ちらちらと後ろを振り返りながら、職員室を出た。たぶん荻野先生は、今の話を近藤先生にしているのだろう。

一将と咲良は、無言で廊下を歩いた。

²「なあ……これでよかったのかな」

不安で仕方なかった。よかったんだと、だれかに言っただけ。

「……うん」

咲良からも不安そうな声しか返ってこなくて、悪い予感しかしなかった。

「ただいまあ」

玄関を開けると、ぴりりと張りつめている空気を感じた。会社を休んだ母さんがいるはずなのに、「おかえり」という返事も無い。

一将は、そっとリビングの戸を開けた。

「どうして言わなかったの？」

母さんの怒っているような、問い詰めているような声でした。

母さんの前には、テーブルをはさんで将人がうつむいている。一将はすぐに、状況を察した。そして、体が重くなつた。

きつと、母さんにすべてばれたんだ。

「ただいま」

もう一度言うのと、「おかえり」と、こちらを見もしないで母さんが言った。母さんは、ひたすら将人を見つめている。

「朝練があるなら、早く起こしてあげるし、大会に出ればいいじゃない」

え？ と、一将は首をかしげた。

「うそをついて休むようなことじゃないでしょう？」

「ちよ、ちよっと待ってよ」

一将は、二人の間に割って入った。

「なんで、将人が怒られてるの？ 将人は悪くないのに」

すると、母さんにぎろっとにらまれた。

「何も知らないのに、一将は黙^{だま}ってて」

「大縄跳びの件^{だま}だろ？」

一瞬^{いっしゆん}、間があつて、母さんの眉間にぎゅっとしわが寄った。

「一将！ 知つてたの？」

「い、いや……」

息を止めたら、空気がもつと重くなつた。母さんが、大きなため息をつく。

「どうして言つてくれなかつたのよ。³先生から電話があるまで、ぜんぜん知らなくて……もうっ！」

母さんの苛^{いらだ}立ちに、将人がびくつとした。

「あの……先生は、なんだって？」

だいたい、どの先生なのかもわからないんだけど。

「最初、近藤先生から電話があつたの。将人くんの具合はどうですかつて」

母さんは、おでこに手をあてながら話しはじめた。

「大縄跳び大会の朝練に、将人が行かなかつたことを叱^{しか}つたのが原因かもしれないって……。それで、荻野先生が謝^{あやま}りた
いって、電話口に出られて」

「荻野先生も？」

「そうよ。将人が朝練のことをちゃんと理解していなかつたようで、すみませんでした。そんなの、先生のせいじゃないのに」

4 「え……？」

一将は、頭の中がぐちゃぐちゃになった。なんか違う……。似ているけれど、ぜんぜん違う。

「それで……将人は、荻野先生と話したの？」

「そうよ。荻野先生、謝ってくれたんでしょう？」

母さんが聞くと、将人はうなだれた。

5 「それなのに、大会には出ないなんて、意地はっっちゃって……」

「いや、そういう問題じゃ、ないと思うんだけど」

一将は焦った。将人をからかったやつらのことが頭に浮かんた。

「将人、荻野先生は、本当に謝ったのか？」

一将は、本当に、つてところに力をこめて聞いた。将人は、肯定も否定もしなかった。その代わり、「もう、大会には出たくない」とつぶやいた。

「まったく、頑固なんだから！ 明日から学校に行きなさい」

母さんはあきれたように言って、席を立った。

一将も咲良から聞いただけだし、何が本当かわからなくなった。でも、荻野先生がごまかした可能性も高い。このままこの件は、うやむやになってしまいうndらるか。

どちらにしても、すごく嫌な気分……。でも、いちばん嫌な気分なのは、間違いなく将人だ。何も悪くないのに、母さんにまで責められて。

「将人……」

一将は、将人の頭に手をのせた。

「大会なんて、出なくていいよ。オレは、将人の味方だから」

こんなことしか言えないアニキって、どうなんだろう。咲良だったら、もっとマシなことを言うんだろうと思う。

将人は、わずかにうなずいた。

(工藤純子『あした、また学校で』による)

1.

A

D

 にあてはまる文をそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア 荻野先生の声がするどくどくがあった。刺すような視線が一将に向けられ、全身が固まる

イ まだ言っている最中なのに、荻野先生はまゆを寄せた

ウ 咲良の声に、荻野先生が顔を上げる

エ 荻野先生がペンを置いて、両手をひざに置いた

2. ———線部1に「一将は、連行される罪人のような気分で職員室に向かった」とありますが、職員室に向かう一将がそのよ
うな気持ちであった理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 荻野先生は生徒の話をまともに聞くような先生ではないため、いやな思いをすることになりそうだから。

イ 荻野先生は近寄りがたい雰囲気があるため、荻野先生を非難するような話をしに行くのは気が重いから。

ウ 荻野先生はほかの先生からも敬遠されているため、ほかの先生からの助け船を期待できないから。

エ 荻野先生は気難しいため、大縄跳びの練習を休んでいる弟の話をまともに取り合ってくれないと思ったから。

3. ———線部2「不安で仕方なかった」理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 荻野先生が電話すれば将人が朝練をさぼっていたことが母にわかってしまうから。

イ 荻野先生が家に電話しても将人に謝罪してくれるとは思えなかったから。

ウ 荻野先生が大会に出たくない将人を無理に出そうとするのではないかと思ったから。

エ 荻野先生が自分たちの言い分を本当に理解して電話するようには思えなかったから。

4. ——— 線部3に「先生から電話があるまで、ぜんぜん知らなくて……もうっ！」とありますが、つぎの会話文は学校からかかってきた電話の様子です。ⅠⅡⅢにあてはまることばを、指定字数でそれぞれ抜き出しなさい。ただし、Ⅲは最初と最後の五字を答えなさい。また、Ⅳにあてはまることばを自分で考えて答えなさい。

近藤先生…お世話になっております。将人くんの担任の近藤です。

将人母…まあ、先生。お世話になってます。将人が学校を欠席してご心配をおかけしてすみません。

近藤先生…Ⅰ(十三字)。

将人母…なかなか良くならなくて……。

近藤先生…ひよっとしたらⅡ(九字)に将人くんが来なかったことを、荻野が学校で叱ったのが原因かもしれない。せん。

将人母…大縄跳びの……朝練ですか。

近藤先生…そうです。その件で荻野から謝罪をさせていただきたいと思ひまして。

荻野先生…荻野でございます。お世話になっております。先日、将人くんを学校で注意したんです。朝練については連絡をしてみたんですが、将人くんがⅢ(十九字)のは、私どもに非があります。将人くんにはやな思ひをさせることになってしまい、申し訳ありませんでした。

将人母…いえ、こちらこそお恥づかしいです。悪いのはⅣ。

5. ———線部4に「一将は、……ぜんぜん違う」とありますが、一将は将人にどのようなことがあったと考えていますか。それを説明したつぎの文の□にあてはまることばを、指定字数でそれぞれ抜き出しなさい。

荻野先生が将人を I (五字) で怒ったことが原因で、クラスの仲間から、「お前がいるとチームが II (八字)」と責められ、それに傷ついて登校できないでいるということ。

6. ———線部5に「いや、そういう問題じゃ、ないと思うんだけど」とありますが、母と一将の考えの違いを説明したものと最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 将人が意地をはらなければ解決する問題だと母が考えているのに対し、一将は荻野先生が将人を被害者と考えていない点が問題だと感じている。

イ 荻野先生の謝罪を受け入れない将人が悪いと母は考えているが、一将は荻野先生が本当のことを理解せずに謝罪をしていると考えている。

ウ 朝練に行くことを黙っていた将人が全面的に悪いと母は考えているが、一将は人づてに聞く将人や荻野先生の言動にひたすら戸惑いを感じている。

エ 荻野先生の謝罪に恐縮して将人を無理にでも朝練に出そうと母が考えているのに対し、一将は将人を信じてやるべきだと考えている。

7. 登場人物の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 将人は兄の前でしか言いたいことを口にできず、内にこもってしまうところがある。

イ 荻野先生は礼儀正しく、生徒の言いたいことをすぐさま理解して行動する人物である。

ウ 咲良は気が強く先生に対してでも物怖じすることなく意見を言える性格である。

エ 一将の母は学校を信頼し、子どもの教育に努める熱心な人物である。

8. この文章の表現の特徴として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア 主人公と登場人物のやりとりによって、弟を守ろうとする主人公の強い決意を浮き彫りにしている。
- イ 主人公の目線で物語がつつられており、周囲の人々をまき込んでいく様子が浮き彫りになっている。
- ウ 短い会話の受け答えによって、家族を思う主人公が学校と家族の板ばさみになる様子を浮き彫りにしている。
- エ 主人公の会話に「……」を用いて、状況がつかめず混乱する様子を浮き彫りにしている。

A、「社会」というのは、そこで生きている人にとって、あるしかたで行動せざるをえないようにしているものなんだよ。そうしないと大変な目にあってしまう。例えば、労働者の敵になるのは嫌だと思ってストライキ破りの職につかないでいると、ほかに仕事がないから飢え死うへじにになってしまう。あるいは、泥棒どろぼうや強盗ごうとうになって生きていけないといけない。飢え死にしてみましたり、泥棒や強盗になって生きていくよりは、まだストライキ破りの仕事に雇われた方がまだよね。そう思うと、ストライキ破りの仕事をしたくない人でも、そうした仕事をしないとイケないということになる。そのことが、一人ひとりの人間にとっての「社会」の意味なんだ。私たちが社会を作って生きていくことは、その中ではあるしかたで行動せざるを得ない状態ができて上がっているってことなんだよ。

【文章B】

しかし、どうして生存に不利なはずの大きくて派手なハネを持っていると、雌クジャクにモテるんだろう？ なぜ雌クジャクは派手なハネの雄おすを好むんだろう？

その理由は、ひとつには、大きくて派手なハネが健康のしるしだからです。健康でないクジャクのハネは色つやが悪く貧相ひんそうなので、色つやが良くて立派なハネをしている雄は健康な雄だということが雌たちに分かるからなんだ。

前にもちよつと説明したように、雌はいくらたくさんの雄と交尾こうびしても、生むことができる子どもの数が増えるわけじゃない。B、雌にとってはたくさんの雄と交尾するとい性質を持つても、たくさんの子どもを残すためには役に立たない。それよりも、どうせ生むことができる子どもの数が決まっているのなら、不健康な子どもを生むよりは、健康で生き残りやすい子どもを生むほうがいい。健康な子どもを生んでおけば、その子どもが大人になって次の世代で孫を生む可能性が大きいから。

そこで、健康な雄と交尾して、健康な雄の子どもを生めばいいということになる。健康な雄の子どもたちは生き延びてたくさんの孫を生んでくれるはずなので、健康に魅力みりょくを感じる性質を身につけている雌は、不健康な雄を好む性質を持った雌よりもたくさんの子孫を残すことになる。ということ、健康そうな雄、つまり大きくて派手な色のハネを持った雄を好む性質が進化することになるんだよ。

C これだけでは、雄クジャクのハネが「度を越して」大きく派手なことを説明できません。いくら健康でも捕食者ほしょくしゃ

に食べられてしまえば、大きく派手なハネを持った子どもたちはたくさんの子孫を残すことができないわけだから。そうになると、本人の生存にとってあまり邪魔にならない程度の大きさと派手さのハネを持った雄が一番モテることになるはずで、生存にとって不利に働くほど極端に大きくて派手なハネを持った雄はモテなくなるはず。

というわけで、健康のしるしという説明では、なぜ雄クジャクが生存に不利なほど大きくて派手なハネを持っているのかはいぜん謎のままです。

この謎を解く鍵は、雌クジャクの好み、ほかの雌クジャクの好みに応じて決定されていることによると、生物学者たちは考えています。つまり、大きくて派手なハネを持つ雄を好む性質は、ほかの雌たちが同じ性質を持っているほど強くなるんだよ。その理由は、ほかの雌たちが自分と同じように派手なハネの雄に対する好みを持っているときの方が、ほかの雌たちが地味なハネの雄を好んでいるときよりも、派手なハネの雄を好きになりやすいからなんです。

なぜそうなのかを説明するために、ここでまず、すべての雌が雄のハネにまったく注目していない状態を考えてみます。雌が雄のハネに注目していなければ、派手なハネの雄が特にモテるわけではないですね。しかし、先に説明した健康上の理由で雌たちが派手なハネの雄を好む性質を身につけ始めると事情が変わってきます。派手なハネに対する雌の好みが弱い間は、ハネの派手さは、モテることで子どもを増やすことができる程度と、捕食者に見つかって食べられやすくなる程度が釣り合ったあたりで進化がとまるはずですよ。しかし派手なハネに対する雌の好みがある程度強くなると、派手なハネに対する雌の好みは加速度的に強くなって、雄の派手さも極端になっていくんですね。

その理由は、多くの雌たちが派手な雄を好む性質を持っていると、派手な雄と交尾した雌が生んだ男の子は、父親の派手なハネの設計図を受け継いでいるから、まわりの仲間よりもモテる大人に成長するからなんだ。

派手でモテる男の子は成長してたくさん雌たちと交尾できるから、その子を作る孫の数は、地味なハネを好む雌が生んだ地味でモテない男の子たちが作る孫の数よりも多くなる。そしてその孫の半分が雌だとすると、孫の代には派手な雄を好む心の設計図を受けついだ雌の数がますます多くなり、そして派手な雄を好む雌の数が増えれば、その分だけ派手な雄がますますモテるようになるんですね。その結果、孫の代には派手なハネを好む雌の数が増えることになる。

こうして、何千世代、何万世代もたつと、派手なハネの雄を好む雌の性質が種の特性として一般化していきます。最初のきっかけは健康のしるしに対しての穏やかな好みだったのが、その好みが増幅されることで、雄のハネがますます大きく派手になり、**D** 大きくて派手なハネを好む性質を雌がますます強く持つように進化が進んでいきます。

その結果、ハネの大きさや派手さは本人の生存にとって望ましくないほど極端になるんだけど、それでも派手なハネは雌にとつて魅力を持ち続けるんですね。それは、派手なハネが自分の生む子どもも生存にとつて有利だからではなくて、ほかの雌がその性質に魅力を感じているので、派手なハネを父親から受け継いだ男の子が雌たちにモテるからなんだ。

だから、仲間たちとの競争に勝つてたくさんの子孫を残す性質が進化したからといって、その性質が本人の生存にとつて有利な性質になるとは限らないんですね。一人ひとり（一羽いちわ）の雄クジャクが、「ぼくはこんな派手なハネは嫌いだし、猛獣に食べられやすいからもっと地味がいいや」と思っているけど、そんな雄クジャクの思いとは関係なく、派手なハネの持ち主がたくさんの子どもを作ることになって、結局はみんな派手なハネになってしまう。安全で地味なほうがいいのかという自分の好みどおりのハネを手に入れたとしても、そうした雄は雌にモテないから、地味なハネは自分一代で終わってしまう。モテない雄は、そうしたハネを受け継いでくれる子どもを作ることができないから。

（山岸俊男『しがらみ』を科学する——高校生からの社会心理学入門』による）

1. にあてはまることばとして適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

ア つまり イ しかし ウ だから エ そして

2. ——— 線部1に「白人の労働者たちは、……考えていた」とありますが、その理由を説明したつぎの文の にあてはまることばを、指定字数でそれぞれ抜き出しなさい。

一九四〇年代から一九五〇年代にかけてのアメリカでは が盛んで、白人の労働者たちが をしてもらうために仕事を一時的に放棄することが多かったので、工場の経営者は経営を続けるために をする必要があり、その際に労働者として たちが雇われたため、白人たちの交渉の妨げになったから。

3. にあてはまることばとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 黒人に正規の仕事が回らないように独占する

イ 労働組合への黒人労働者の参加を拒否する

ウ 法律で黒人に与える仕事を規制する

エ 黒人たちが農業地帯でしか働けないようにする

4. 線部2『社会』について考えるときの一番重要な点について説明したつぎの文の にあてはまることばを、十七字で抜き出さない。

社会というのは、そこで生きる人びとが を作り出しているという点。

5. 線部3に「大きくて派手な……強くなる」とありますが、その理由を説明したつぎの文章の にあてはまることばを、指定字数でそれぞれ抜き出さない。

I(六字) である派手なハネを持つ雄と雌との間に生まれた子どもが雄の場合、父親が持っていた II(九字) を受け継いでいるため、まわりの雄よりも魅力的な見た目に成長し、たくさんの雌たちと交尾できるようになる。すると、その子、孫と代が進むにつれて、派手なハネを持つ雄を好む性質を引き継ぐための III(五字) を受け継いだ雌の数が増えていくため、その性質が種の特性として IV(三字) していくから。

6. つぎの会話文は、【文章A】と【文章B】を読んだあとの京一さんと華子さんの会話です。二人の会話の中に出てくることばを、【文章A】から七字で抜き出しなさい。

I

II

III

京一…今回読んだ二つの文章はそれぞれ、黒人差別とクジャクのハネの話だったよね。

華子…全然関係がなさそうに見える話だったけれど、よく読んでみるとなんとなく似ている気がしない？

京一…それはぼくも思った。どうしてだろう。

華子…【文章A】は黒人労働者の話だったわよね。読んでいて思ったのは、黒人労働者がかわいそうってことかな。

京一…たしかにそうだね。黒人労働者はIだけなのに、黒人たちが選んだ仕事を見て、周りがみんな「黒人は白人の敵だ」と思うことで、結果的に白人たちの敵になってしまった。

華子…望まない形でそうなってしまったわけよね。

京一…でもそれは、【文章B】の雄クジャクも同じじゃないかな。

華子…たしかに、望む望まないに関わらずそうなってしまいうっていう点では同じかもしれないわね。

京一…うん、雄クジャクだって、IIだけなんだよね。でも周りがみんな、派手なハネがいいって思うようになって、やがてそれが当たり前になってしまった。

華子…つまり、周りがそう思い込むことによつて、それがそのまま事実になってしまふということね。
京一…筆者はそのことをIIIと表現していたよ。

I ア 労働組合に入りたくて、何でもいいからまずは職を得ようと思った

イ より良い待遇を求めて、白人と協力しながら一緒に働こうとした

ウ 嫌な仕事であっても、働かないことには生きていけないと考えた

エ 白人から敵視されていたから、工場で働く以外の選択肢がなかった

II ア 危険は避けたいけれど派手なハネでないと雌が寄ってこないから、結果的に派手なハネを身につけることになった
イ 邪魔になるくらい大きくて派手なハネでないと、健康をアピールできないから身につけた
ウ 天敵から狙われるハネは嫌だけれど、母親が派手なハネを好む雌だから身につけることになった
エ 周りの雄より目立てば雌にモテると思つて、あえて好きでもない派手なハネを自分から身につけた

三、つぎの①～⑤の——線部の漢字の読みを、ひらがなで書きなさい。

- ① 束つかになってかかってこい。
② 彼はかれこうべを垂たれていた。
③ 委員長としての務つとめを果たす。
④ 合宿で点呼てんこをとつた。
⑤ 万全まんぜんの対策をして入試のしに臨むかむ。

四、つぎの①～⑤の——線部のカタカナを、漢字に直しなさい。

- ① 君はすぐに話をはなし返す。
② 腕うでをフルふるつて料理する。
③ 天皇てんかうへイカいが即位そくいした。
④ 首相が新しいセイサクせいさくを打ち出した。
⑤ 新シーズンがカイマクかいまくする。